

キャン ドウ

CanDo アフリカ

特定非営利活動法人アフリカ地域開発市民の会(CanDo)会報 2017年6月[第79号]



活動の方向性	地域保健ボランティア(CHV)育成とユニット(CHU)の活性化	永岡 宏昌
ナイロビ便り	総選挙に向けての動き	永岡 宏昌
ひと	インターンを終えて	吉田 菜摘/伏木水紀/福井 修/田口 敏広
ケニアでの活動	2017年1月~4月	
国内	2017年度年次総会報告	
フォト・レポート	CHV 育成の活動から	
事務局から		

上の写真は、建設されて19年後に看護官が配属され、開所された診療所。下は、診察用のベッドを机代わりに使用している看護官。



地域保健ボランティア(CHV)育成と地域保健ユニット(CHU)の活性化

代表理事 永岡 宏昌

2013年にマシंगा県保健局の提案で始まった、県と当会の協働による地域保健ボランティア(CHV)育成と地域保健ユニット(CHU)活性化の活動が終盤となっています。この活動では、まず無償ボランティアであるCHVの役割と地域への貢献を住民が理解し、その上で適切なCHV候補を選ぶことができるように、地域リーダーへの保健研修や当会スタッフによる村訪問を行ないました。そして、住民から選ばれた、保健活動への関心が高い候補に育成研修を実施。県で7つのCHUを形成し、あと1つに取り組みます。

研修を修了したCHVは、自分の村で担当する家庭を訪問して、健康に関する情報を入手し、必要に応じて助言します。保健局と連携して、住民の健康の向上に貢献するために、得た情報を診療所などに毎月報告することになっています。保健局ではこの報告を重視するあまり、「報告をしないCHVは全く役割を果たしていない」と言い切る地域保健普及官(CHEW)も少なくありません。

しかし、個別の活動について見聞きすると、近隣の住民に子どもへの予防接種やトイレ作りを説得したり、その作業に協力したり、診療所まで付き添ったり、また、個別の相談に対応したりしていました。研修の参加が滞っ

ているCHV候補を訪問して、夫や義母が病気で、介護のため家を出られないといった、事情が分かりました。一方、義母の病気で研修を欠席していたCHVが、亡くなったあと追加研修に復帰した例もありました。

CHVのほうからは、住民との信頼関係作りの苦勞をよく聞きます。保健知識を伝える学習会を計画しても、食料やお茶などがもらえなければ話を聞かない、と言われるそうです。そこには、CHVはCanDoから利益や手当を得ているに違いない、という事実と異なる住民の思い込みと、背景にNGOによっては、CHVに手当や学習会への報酬などを出している事実があります。

これらの課題は、CHVが地域の保健専門家として住民に認められる実績を積み上げていくことで克服できると考えます。保健の情報の量と質をよくすること。住民や小学校・幼稚園の保護者に教える能力を高めること。村での学習会開催の機会を増やすことが必要です。そのために、エイズの研修に加えて、早期性交渉予防、子どもの保護、学校での手洗い、栄養バランスのとれた食事など、課題ごとの小規模な研修を実施し、学習会開催への協力を行ないます。それが、地域保健の持続性の保障につながると考えます。

ナイロビ便り

総選挙に向けての動き

永岡 宏昌

2017年8月8日にケニアでは総選挙が行なわれます。この選挙で、大統領のほか、上院・下院の国会議員、地方政府の首長、地方議員を一度に選出します。

2回前の総選挙では、選挙後暴力が起こりました。2007年12月、現職大統領キバキと有力候補者のオディンガは、支持率が拮抗していて、オディンガが優勢を思われる中で、キバキの再選が発表されました。その結果をめぐり、全国的な暴力事件に発展して、1133人以上の死者と多くの国内避難民を出す混乱状態になりました。

この選挙後暴力について、国際刑事裁判所(ICC)は、2つの事件を特定し、それぞれ首謀者をケニヤッタとルトとしました。背景となる民族グループが相手方に対し、人道に反する罪を犯したとして、予審裁判を行ない、起訴相当としました。

そのような状況で、次のキバキ引退後の2013年3月の総選挙に向けて、ケニヤッタとルトが、大統領・副大統領候補として連携しました。2007年に深刻に対立したケニヤッタとルトとの連携は、ICCからの訴追逃れと解釈されました。欧米諸国の評価が低い中で、現職の首相オディンガがムシオカと連携した対立候補は、再びオディンガ優勢と思われる

いました。しかし、ケニヤッタが50%を少し超える得票で、決選投票を行わずに大統領に当選しました。選挙開票が予定通りに進まず、集計トラブルも発覚し、緊張の中での僅差での大統領選出でした。それにもかかわらず、2007年のような大規模な暴力の勃発にはなりません。

正副大統領となったケニヤッタとルトへのICC裁判は、ケニア政府から公判を維持できる協力が得られないとの理由で、ICCが審理無効としました。両人が連携した目的が、達成されたといえます。そして、2017年総選挙を迎えます。組み合わせを変更せずに、ケニヤッタとルトが正副大統領候補として、対抗するオディンガも前回と同じムシオカとの連携で立候補しました。

このため2013年と同様に、概して平和な総選挙が実現することを期待しています。一方、大統領から国会議員、地方首長、地方議員まで一度に選ぶ総選挙なので、地域レベルでのさまざまなトラブルも心配されます。さらに選挙へ治安対策が優先されるため、一般治安の悪化へも十分な予防行動をとる必要があります。選挙期間の緊張状態を安全に乗り切り、早く円滑に通常の活動に復帰したいと考えています。

ひと インターンを終えて

約半年間で経験したすべてを、生かすつづけたい

吉田 菜摘

朝ごはんに飲む、砂糖たっぷりの温かいミルクティー。カラッとした乾季の昼下がり、絵に描いたような青い空とそこに浮かぶ雲。子どもの笑い声。乗り合いバスや街中で流れるカンパミュージック。日本のこの5月の暑さから思い出され、ケニアが恋しくなる。

私は、2017年6月末から12月初めまでの期間、インターンとして教室建設・補修活動と環境活動を担当した。ある日ケニア人スタッフから、教室補修の活動が順調に進んでいる小学校で、活動の記録係をしていた保護

者が亡くなったと聞いた。私は、その保護者にそれより1週間前に会ったばかりだった。1週間前には元気だった人が、死んだのだ。驚く私に、そのスタッフは「人は死ぬ。ケニアではこれが起こる」と言った。

帰国後、ケニアでの経験が自分にとって何だったのか、どんな変化があったか、といった質問を頻繁にされる。ケニアで過ごした約半年間、そしてそこで経験したすべてを、思い出として消化してしまうことなく、自分の心に生かすつづけたい。

ケニアに飛びこんで学んだこと

伏木 水紀

2016年12月までの半年間、施設拡充チームでインターン業務に従事した。帰国から半年が経とうとする今、ケニアで過ごした日々と思うことは、そこはまさに「劇場」であったということだ。事業に関わる地域の人々や行政関係者、スタッフ、そして彼らが生きる社会の流れ、日々すべてが交錯しあい、上手くいったりいかなかったりしながらも、舞台は進行している。そして私がすべきことは、そこで自分の「役」を演じることであったのだ、と思う。

この半年間で、私は私が生きるために本当に必要なことは何であったかを学んだ。この経験は、ケニアで出会った方々、日本から支えてくれた人たち、たくさんのことを教えてくれた彼らすべての人々への感謝の一言に尽きる。

この先どの国でどんな国際協力に関わっても、ケニアで学んだことを決して忘れないでいたい。そしてこれからも、私は彼らと一緒にアフリカの将来を見つめていきたい。

ケニアでの活動で感じたこと

福井 修

2016年6月から半年間インターンとして保健チームの活動—地域保健、学校保健、幼稚園での保健活動—に携わった。

この期間、2つの地域保健ユニット(CHU)で地域保健ボランティア(CHV)育成研修があり、CHV候補者の選考のため村々を訪問し、多くの住民と接した。CHV候補者の多くは、自らの仕事がありながらも無償のボランティア活動に参加する、意欲の高い人々だった。しかし、過去に形成したユニットでは、時間とともに活動に参加する人々が減ってしま

っている現実も知り、持続的な活動の難しさを感じた。一方、意欲的に活動に取り組んでいるCHVもいて、活動の意義、成果を見ることが出来た。小さな変化かもしれないが、この積み重ねがとても重要なのだと深く思った。また学校保健、幼稚園活動では、学校を訪問する機会があり、元気いっぱいの子どもたちと触れ合う機会もあった。

まだまだ課題の多く残るケニアだが、滞在中は多くの笑顔に出会うことができ、その印象が今でも強く心に残っている。

自分の全力が通用しない場所で

田口 敏広

2016年末から翌年3月末まで、保健チーム担当のインターンとしてCanDoの活動に参加しました。大学の学期が始まる時期の関係から、本来は6か月のインターン期間の半分である、3か月の期限だった故、他人の2倍働いて学ぼうとの意気込みでケニアに渡りました。

最初は、求められる仕事になかなかできず、先輩インターンとケニア人スタッフに受動的にしか関わられませんでした。日々の活動の中で、一切のミスは許されず、ベストな結果を出すために、一瞬一瞬油断無く頭を働か

せました。現場で働くときに注意すべき点は、日本に住んでいる自分の思考ではとらえられない物ばかりです。一つ一つのケースにおいて個別に、具体的に取り組むことは、非常に難しく、「現場」の意味を再認識する重要な過程でした。

海外の地で外国人として開発に取り組むことは、如何なることなのか教えられた3か月でした。自分の全力が通用しない場所で、自分を適当に変化させながら結果を出していく経験は、私の人生でも大事な成長の時となりました。

ケニア共和国マチャコス地方マシंगा県での活動—2017年1~4月

◆小学校で

◇保護者の学校運営能力向上と施設拡充—教室の建設、構造補修、基礎保全のための土留め壁造り—

・11校で計15教室の構造補修が完成—1教室目3校、2教室目3校、2・3教室目2校、3・4教室目2校、4教室目1校。

◇保護者による環境活動

・3校で乾燥野菜作り、栄養及び乾燥野菜を給食で使う研修を実施。

◇エイズ子ども発表会

・エイズ教育研修を修了した教員による、エイズ子ども発表会が開かれた2校で、参与観察。

◇早期性交渉予防研修

・2校で、教員・保護者への研修と子どもへの保健トーク、1校で教員への研修を実施。

◆地域で

◇地域保健リーダーへの保健とリーダーシップ研修

・カンゴンデ区ムシギニ準区で実施。

◇地域保健ボランティア(CHV)育成

・ミクユニ準区で育成研修を実施。ムシギニ準区でCHV候補選出のための村訪問。

◇CHVへの研修

・エイズ研修を、カトゥリエとミクユニ地域保健ユニット(CHU)で実施。CHVによる学習会をズキニとカトゥリエCHUで参与観察。

・早期性交渉予防研修を、ミアンゲニとエカラカラCHUで実施。CHVによる学習会をミアンゲニCHUで参与観察。

・子どもの保護研修(名称を、子どもの虐待予防から変更)を、ムクスとエカラカラCHUで実施。

国内 3月18日、2017年度年次総会を開催しました

3月18日、不忍通りふれあい館で、2017年度年次総会を開催しました。一般会員29人が出席—うち書面表決9人、表決委任12人—、一般会員53人の3分の1以上という定足数を満たして成立し、加藤明彦さんが議長を務めて、審議を行ないました。

第1号議案 2016年度活動報告・会計報告と、第2号議案 2017年活動計画・予算書が承認されました。

主な説明に「公的支援金の会計年度2017年度末(2018年3月末)で基本的にケニアでの活動を終了するので、ケニアでの活動については最後の計画となる」ことがあります。質疑応答では「ケニアでの活動をどうまとめ、引き渡すのか」という質問があがり、「中央政府国会議員選挙区開発基金(NGCDF)の資金調達担当に教室の構造補修のマニュアルなど提出している」という説明がされました。

フォト・レポート

地域保健ボランティア(CHV)育成の活動から



地域保健ユニット(CHU)の形成の協力で、当会が県保健局に診療所の開設を条件としていた地域で、その甲斐もあってか、実現し(表紙の写真)育成研修を近くの教会で開始。



CHV育成研修(全4週)が終了すると、準区助役、県保健局と当会の共催で、修了証授与式を開きます。最初に準区助役が挨拶。



村長老と一緒に、県主席公衆衛生官からCHVに修了証を授与します。



授与式で、保健活動として住民にトイレを作るよう助言して、成果があがったかどうかを尋ねると、多くのCHVが挙手しました。



左のトイレは、住民との3回の話し合いのあと、CHVがレンガ作りにも協力して、完成。右のような仮設のものでも意義があります。



研修や活動への参加が低調なCHVを家庭訪問。それぞれの事情を聞いて歩きました。



CHVへの子どもの保護研修を始めました

事務局から

報告

◇組織

○3月18日、2017年度第1回理事会を開催。
2017年度年次総会にかけの議案を承認。
○3月18日、不忍通りふれあい館で2017年度年次総会を開催(p.6 参照)。

◇支援

○2月24日、在ケニア日本国大使館と日本NGO 連携無償資金協力「マシング準郡*子どもの健康と安全を保障する学校地域社会の改善事業(3年事業)第3年次を締結(2017年3月5日～2018年3月4日。供与限度額:34万8585米ドル)。*会報では「県」を使用。

◇国内活動

○『アフリカ教育研究 第7号』(アフリカ教育研究フォーラム 2016年12月発行)に、代表理事永岡宏昌の論考「ケニアにおける子どもの教育と健康の保障に関する考察—NGOの活動経験を踏まえて—」が掲載されました。次のウェブサイトからダウンロードができます。

https://sites.google.com/site/aerf1960/kiyou/africa_vol7

◇人の動き

○2月14日、高梨 由美が調整員(非常勤)として勤務を開始。
○3月3日、インターン 安田詩香、26日、同田口敏広が研修期間を終了してケニアから帰国。
○3月4日～4月2日、松岡 由真を短期調整員としてケニアに派遣。
○3月7日、望月 大吾、10日、岩崎 弘治をインターンとしてケニアに派遣。
○3月14日、永岡がケニア出張から帰国。
○3月22日～4月9日、永岡と事務局員(事業担当)今村 純子がマラウイに出張。
○3月29日、調整員(非常勤)橋場 美奈がケニアから帰国。4月16日、出発。
○4月4日、短期調整員 宇野 由起信が任期を終了してケニアから帰国。
○4月16日、白石 直子、24日、木村 正司をインターンとしてケニアに派遣。
○4月26日～5月7日、永岡がケニア出張。
○5月21日、インターン 望月 大吾がケニアから帰国。

■CanDo 勉強会 2017・東京-11～12月開催予定
■次号は、2017年9月に発行の予定です。

CanDo アフリカ [第79号]

2017年6月2日発行

発行人:

永岡宏昌

編集人: 佐久間典子

発行:

特定非営利活動法人アフリカ地域開発市民の会 (CanDo)
〒110-0001 東京都台東区谷中2-9-14 第2森川ビル B号室

電話/FAX:

03-3822-1041

電子メール:

tokyo@cando.or.jp

ウェブサイト:

<http://www.cando.or.jp/>

郵便振替:

口座番号 00150-2-15129 加入者名 アフリカ地域開発市民の会